月夜駕籠

風車の浜吉捕物綴

伊藤桂一

新潮社

風車の浜吉捕物綴

月夜駕籠

佐藤桂一

新潮社

月夜駕籠（つきよかご）——風車（かざぐるま）の浜吉捕物綴（はまきちとりものつづり）——

著者　伊藤桂一（いとうけいいち）

発行　一九九五年二月二〇日

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
株式会社　新潮社

電話　営業〇三(3266)五一一一　編集〇三(3266)五四一一

振替　東京四—八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社　製本所　大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Keiichi Itô 1995, Printed in Japan

ISBN4-10-301809-7　C0093

目

次

狐憑きの娘……7
月夜駕籠……35
月あかりの渡し場……65
鴉の呪文……93
かんざし釣り……121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

塀の外の化物……149
あの世で婚礼……175
狐の嫁入り……201
似顔絵の女……227

装幀・蓬田やすひろ

月夜駕籠

――風車の浜吉捕物綴――

狐憑きの娘

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いつにない、あたたかな新年で、うららうらと春先のような陽がさしている。

正月の三日、小石川は伝通院の境内で、例によって浜吉は、子の松太郎を連れ、銀を手伝わせて風車売りをしていたが、風車に小さな注連飾りを結びつけたから、陽気のよさも手伝って飛ぶように売れる。まだ正午にはかなり間があるというのに、みんな売り切れてしまって、

「こんな調子じゃ、そのうち蔵が建ちそうだよ、親分」

と、銀がからかう始末。

浜吉のつくる風車は、五本の細い竹ひごを蛇籠の形に編んで、出てくる十本の竹ひごの先端に、風受けの色紙を貼ったもので、少しの風にも華やかによく廻る。当節、江戸ではだいぶ名の売れてきた風車である。

品物が売れてしまっては、店をしまうしかない。ちょうど今日が、弁天堂の初巳の縁日だから、帰りは弁天様を拝んでご利益を願って、不忍池のほとりの料亭で、なにかうまいものでも食うことにしよう、ということにして店の片付けをしているところへ、小日向の御用聞喜助のところにいる留造がやってきた。喜助が足を痛めて以来、留造が喜助の代りをつとめているが、何事があ

っても留造は浜吉のところへ相談に来る。喜助は浜吉の幼馴染だからである。その留造は、姉が嫁ぎ先で重病になり、見舞いに行くといっていたのを、浜吉は知っている。それで、様子をきくと、

「おかげさまで、持ち直しました。会っとけば気がすみますんで、ほっとして帰りました。これはほんの手土産の、干瓢と落雁ですが」

と差し出すのを銀が受けとる。

「うばがい」か正しい

留造の姉の嫁ぎ先というのは、常陸国は道場宿の鬼怒川の渡しを越えた、祖母井村の外れの農家である。（現、栃木県芳賀町）

「もう店仕舞ですか」

と、驚いている留造に、一緒に弁天堂に廻ろう、うまいものをご馳走するよ、と浜吉がいうと、留造は、

「捕物稼業をしておりますと、妙なもんで、行く先々で、変なできごとにぶつかりますね。このたびも、行った先で、はてな？　と首をかしげることがありまして、いまだに気になってます。ひとつ、酒の肴にでも、きいていただきましょうか」

といい、店の片付けを一緒に手伝い、それから連れ立って伝通院を後にした。

弁天堂も、正月に初巳祭が重なると、いっそうの賑わいである。

「このあたりに風車の出店を出したいもんだねえ」

などと冗談をいい合いながらに、人波にもまれもまれ、お詣りをして、細竹に結びつけた小さな飾り絵馬を買って、玩具代りに松太郎に持たせてやり、一同は不忍池のほとりの「望水亭」という小料理屋へ上がった。昼食をとることになる。松太郎には、先に串団子をとってやり、酒が出て座がくつろぐと、留造がさっそく、旅先での話をしはじめる。

留造が、道場宿の渡し場へ着いた時は、もう日が暮れかけていたが、渡しの船頭が急な腹痛を起してしまったとかで、船が出ない。川べりで、半刻近くも待たされて、代りの船頭がきてやっと渡してもらったが、向こう岸へ着いたら、もうすっかり夜になっていた。ただ、冴え冴えとした月あかりの晩だったので、先を急いでいると、そろそろ祖母井村に入るころになって、向こうから、娘がひとりやってきた。それも、懸命に歩く、といった速い足どりである。

もう渡しも終わってしまったはずだし、好きな男のところへでもいそいそとして出向くのか、と、余計な気を廻しながらに近づき、留造はすれ違いざまに娘の顔をみたが、向こうはまるで、留造のことなど眼中にない。みるまに行き過ぎてしまう。

「つまり、狐憑きの状態で、眼はうつろに虚空をみつめ、わき目もふらずに歩いている、といった歩きぶりなんです。ともかく尋常じゃありません。それで、どうにも気になり、あとを追ってゆき、声をかけてみたんです」

留造が、追いついて、うしろから、

「ちょいと、ねえさん」

と呼びかけたが、まるで耳にはいらないらしい。その歩きぶりは、ますます気になる。留造は、

すっかり、狐憑き、と思い込み、それで、犬の鳴き声をすると正気に返ることもある、ときいていたので、娘の耳もとで、思いきった大声で、ワン、ワン、ワワワン、と吠えたてた。
「留さんは、寄席に出したいくらい物真似がうまい、と喜助にきいたことがある。娘は、さぞびっくりしただろう」
と、浜吉は、酒をついでやりながらに、笑う。
「自分でいうのも何ですが、マタギ犬の吠えるような、こわい声で吠えてやったんです」
すると、娘は、石にでもつまずいたようにして、立ちどまっている。
「正気に、もどったのかね？」
「もどりました。こっちをみて、しばらく怪訝そうにしていましたが、あなたはだれですか、というんですよ。少し話してみてわかったんですが、娘は、自分がなぜ夜道を歩いていたのか、まるでわかっていないんですね。知り合いがあるわけでも、用事があるわけでもないんです。ただ、気がついてみたら歩いていた、というんです」
「なに、ただ歩いていたわけじゃない、用事があったのさ」
と、浜吉はいう。
「ほう。すると、狐憑きでもない、ということなんで？」
「狐憑き、といえばそのようなもんだが、それにしても、留さんの犬の声はよっぽど真に迫っていたんだろう。ふつうは、そう簡単には、正気にもどらないんだがね」
浜吉は、そこで、少々考えてから、いう。

「おれは、江戸を追放されていた五年もの間、諸国を流れ歩いたんで、いろいろな目に遭ってきたが、これと似た話も、二つ三つ耳にしたことがあるな。——それで、その娘を、留さんはどうしたね？」

「娘は名をタミといいました。あっしが行く姉の嫁ぎ先の近くなんです。それで、連れ立って、送って行きました。みちみち、なにかときいてみたんですが、まったく何一つ覚えていないんですね」

「その村に、若い娘の神隠しがあったかどうか、気になるところだが」

「それも、きいてみましたが、村には、そんなことは何もなかったそうです」

「近辺の村々についても知りたいもんだが、留さんも、姉さんの病気見舞いじゃ、そこまで手は廻らなかったろう」

「いえ、つぎの日に、あちこちときき廻ったんです。これはどうも妙だぞ、と、耳の奥で風車の風がささやきましてね」

「おやおや、たいしたもんだよ、留造親分も」

と、これは、銀が、少々まぜ返す気分でいう。

翌日留造が、近辺をきき廻ったところでは、七井、石坂、大月といった村々で、ここ一年ほどの間に、娘が姿を消している。一年ほど前に、このあたりを市川団吉郎一座という旅廻りの一座が、社寺の境内で興行して歩いたから、色事上手の旅役者にでもかどわかされたのではないか、と、いっている人もある、という。それに、農家の娘は江戸の暮らしにあこがれて、家を出てゆ

くのもいないわけではないから、
「必ずしも、神隠しばかりでもないらしいんです。それで、まア、首をかしげながらに江戸にもどってきたんですが」
と、留造は、なおも首をかしげる。
「きいてると、どうも、首をかしげて一杯飲んでる場合でもなさそうだな。よその土地にちょっかいは出したくないが、留さんに縁故のある村のことだ、ほってもおけない。これはおれの考えだが、その娘は、そのうちにまた、夜中に家を出て歩き出すだろうね」
「ほんとうですか。じゃ、狐憑きがぶり返すんですね」
「裏になにかあるよ。ちょうどひまで、あたたかな正月だし、みんなで江戸を離れての捕物をやってみるか。留さんは銀と一緒に、先に行ってなにかと調べ廻ってくれ。おれはよそを廻ってから、遅れてそっちへ行く。面白くなりそうな気がするね。――ところで、帳場で、硯と紙を借りてきてくれないか」
浜吉は、銀にそういい、銀が店の帳場で硯と紙を借りてくると、さっそく紙の上に、つぎのような文字を、二枚書いた。

口×口×狐
口×口×狐　　口×口
口×口×狐　大鬼王　口×口
口×口×狐　　喰急如律令

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com